

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

Topics | 開館20周年記念展 杉本博司 趣味と芸術一味占郷 / 今昔三部作
開館20周年記念 データで見る千葉市美術館の20年





千葉市美術館は、今年の11月3日で、開館20年を迎えました。これを記念する特別展覧会「杉本博司 趣味と芸術—味占郷／今昔三部作」が、いま開催されています。杉本博司は、開館第2弾の展示「Tranquility—静謐」の招待作家の一人ですが、現代美術家として、写真はもとより、インスタレーション、建築などの造形芸術にとどまらず、日本の伝統芸能に属する、文楽と能の演出・創作にも取りくみ、さまざまな芸術世界を横断する、その縦横な活躍ぶりは、常に衆人の注視するところであり、世界的にも高い評価を得ている現代の日本を代表する美術家です。

わたくし事ですが、杉本さんとは、30年前から面識があります。初めてお目にかかったのは、1987年の春であったと思います。当時、コロンビア大学に出講中で、ニューヨークに滞在していたわたしは、細見良行さん(京都・細見美術館館長、この展覧会の次の巡回先でもあります)に誘われて、ニューヨークのソーホー地区にあった杉本さんの店を訪ねました。

店の名前はたしか「MINGEI」といったと思います。ですからお店には日本のいわゆる民芸品もむろん陳列されていたのですが、わたしの目を驚かせたのは、そこにあった仏像や仏画の数々であり、根来の大きな器の朱色の美しさと形の素晴らしさはいまでも眼の奥に残っています。その時、杉本さんは、自分は写真家でアメリカでも個展を開き、ニューヨークの幾つかの美術館には、作品も所蔵されているのだと話されましたが、その時のわたしは、実は、いわばそれを半信半疑で受け取るしかありませんでした。

というのも、先刻ご承知のように、ニューヨークにはそういった自称写真家、芸術家が、五万と居ます。現在も恐らくそうでしょう。ですから、写真家であることはともかく、鋭く確かな美意識と優れた鑑識眼をもつ杉本さんが、早晩、ニューヨークで一流の古美術商になるだろうと想像し、またそれを大いに期待もするところでした。

間もなく東京に帰ったわたしを訪ねてくれた細見さんが、いま「杉本が写真展をしているので、一緒に見に行きませんか」と、また誘ってくれました。「うん、見てみたい」と応え、連れ立って、江東区の佐賀町にあった、古い倉庫を利用したギャラリーに出かけました。ここでは、いまでは歴史的な評価を受けるような現代美術のすばらしい展覧会が、そのころ幾つも開催されましたが、杉本さんの個展もそのうちの一つであることは言うまでもありません。そこに展示されていたのは、のちに杉本さんの代表作として最もよく知られるところとなった「海景」のシリーズでした。

静謐さをたたえそこにある写真「海景」には、圧倒的な存在感があり、おそろしいくらいに、観る者に迫る力を感じました。これこそ、写真という新しい技術・媒体を周到かつ縦横に活用した、現代美術における水墨画だと、その時即座にわたしは思いました。そこには、水墨画に不可欠な、空気の流れや変化する微妙な光までもが見事に表現されています。まさに、写真家杉本さんに脱帽です。私的な記

憶ですが、このときわたしは、この写真が欲しいと思いました。いまからすると十分の一の値段でしたが、購入する決断がつかないでいると、杉本さんが図録にサインしてあげると言われるので、それを頂き喜んで持ち帰ったことを思い出します。

この「海景」シリーズは、1980年から今日に至るまで引き続き制作されており、今回、千葉市美術館で開催中の「今昔三部作」のうちの一つとしても展示されていますが、これは、最新作を加えた大判プリントをニューヨークの杉本スタジオから借用したもので、いわば日本での初公開といえます。

いま一つ、現代美術家としての杉本さんの才能を遺憾無く発揮していると言えるのが、千葉美術館での展示「趣味と芸術—味占郷」にもみられる、もてなしのための床飾り、すなわち、美術品収集家としての杉本さんの優れた感性と鑑識眼によって選び抜かれた古今東西の名品・珍品の組み合わせの妙、いわゆる道具組で、そこには、新たな「芸術」を生み出そうとする杉本さんの姿が明確に示されています。言い換えれば、それは、杉本さんによる見事なインスタレーションの試みに他なりません。

杉本さんと出会ってほぼ30年。その時には予想だになかった、一緒に仕事をする機会を得たことは、美術館で働くことになったわたしにとっての大きな収穫であり、大いなる喜びでもあります。

いま、館長に就任して、まもなく4年目を終えようとしています。来年1月9日からは、開館20周年を記念する展覧会の掉尾を飾る特別展である「初期浮世絵展—版の力・筆の力」を開催します。この展覧会には、国内外の美術館や個人所蔵家から多くの貴重な作品を拝借し、これまでにない充実した初期浮世絵の核心・真髄を示す展示を計画することができました。是非ともご期待頂きたく、また併せて更なる美術館に対してのご支援をお願いする次第です。来年もよろしくお願い致します。

【館長 河合正朝】



記念講演会「時を測る—江之浦測候所建設計画近況報告」より作家との対談 左:杉本博司氏、右:館長 河合正朝(2015年10月31日)

趣味と芸術——味占郷——今昔三部作

杉本博司

「私は写真家と思われている嫌いがあるが、実際は興味の赴くままに制作しているだけで、写真を使うことが多い、といった程度にしか自分では意識していない。」

杉本博司 『現な像』より

杉本博司は写真家である。少なくとも1990年代までは、多くの人々がそう信じて疑いませんでした。1970年代中頃にデビューして以来、杉本は、現代美術の領域でもっぱら写真作品を発表してきました。ところが世紀が変わるころから、神社や茶室の建築、能や文楽の演出など、日本の伝統文化の領域にまでその活動範囲を拡げていきます。本業の現代美術家としての活動も、2003年より北米と日本各地を巡回した「歴史の歴史」展以降、自らのコレクションに自作の写真も加えた展示がその中心となっていきました。

2部構成の展覧会「杉本博司 趣味と芸術——味占郷／今昔三部作」は、現代美術の領域で写真を発表してきた杉本博司と、日本の伝統文化に新たな生命を吹き込んできた杉本博司という、この作家の2つの顔を紹介します。20年前に当館の開館記念展「Tranquility-静謐」を開催したとき、杉本は5人の参加作家のひとりとして、「海景」シリーズ18点を展示しました。それらは展覧会終了後、当館のコレクションに収蔵されました。本年11月3日、千葉市美術館が開館20周年を迎えるにあたり、ふたたびこの作家を招聘し、個展を開催いたします。

「今昔三部作」——杉本芸術の真髄

「今昔三部作」の「三部作」とは、杉本の代表作というべき3つの写真シリーズ、「ジオラマ」「劇場」「海景」のことです。杉本は、デビュー直後の1975年から「ジオラマ」と「劇場」、1980年から「海景」の制作を開始して以来、1994年「恐怖の館」に着手するまでの20年近いあい

だに「三部作」の発表によって世界的な現代美術家としての地位を築き上げました。三十三間堂の千体仏を写した「仏の海」(1995)を皮切りに、2000年代初頭にかけて新たな写真シリーズを次々と世に送り出していった時期にも、「三部作」の制作は並行して続けられました。それどころか2010年代になってもなお、「ジオラマ」と「劇場」の新作が発表されています。「三部作」は現在も続いているのです。

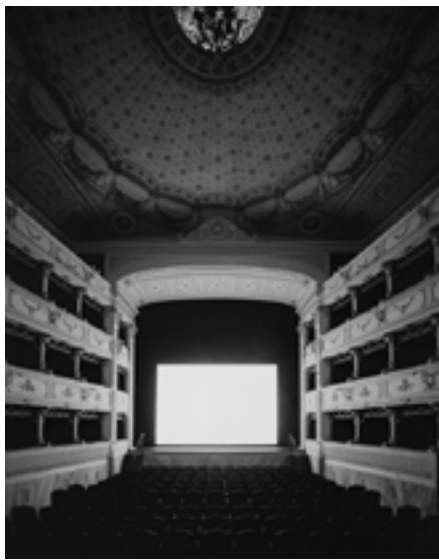
「三部作」は、単に杉本博司の代表作というだけでなく、その後つくられた様々な写真作品の発想源ともなりました。アメリカの自然史博物館にある動植物の生態展示をリアルに写した「ジオラマ」からは、蠟人形を生きているように撮影した「恐怖の館」と「肖像写真」のシリーズが派生しました。長時間露光で映画館のスクリーンを撮った「劇場」からは、同じく長時間露光で蠟燭が燃え尽きるまでをとらえた「陰翳礼賛」が生まれました。水平線が画面を等分する「海景」のシンプルな構図は、90年代後半以降の様々なシリーズに影響を与えています。

本展で展示される写真は、すべて大判プリントです。杉本は2000年、スタジオを切尔西に移してのち、このフォーマットを使い始めました。それまでは「三部作」でも小型のプリント(42×54cm)が使われており、千葉市美術館が収蔵する「海景」もすべてこのサイズです。119×149cmを基本とする大判プリントの「三部作」は、国内にはあまり所蔵されていないため、16点の出品作品すべてを、ニューヨークの杉本スタジオからお借りしました。大判プリントの「三部作」だけで構成された展覧会は、これまで例がないそうです。

作家自身によって「今昔三部作」と展覧会名が付けられた理由は、各シリーズとも初期作と最新作(「海景」をのぞく)が出品されているからです。今回展示された初期作と最新作のあいだには、「海景」で約15年、「ジオラマ」と「劇場」になると35年を超える年月の隔たりがあります。こうして一堂に展示すると、この作家が初期からすでに、高い撮影技術を身につけていたことが分かります。とはいえ、「ジオラマ」では幅4mを超える最新作《オリンピック雨林》(2012、図1)が、「劇場」では縦型の最新作《テアトロ・デイ・ロッツィ、シエナ》(2014、図2)がそうであるように、「三部作」には新しい試みも取り入れられてきました。ぜひご自身の目で、初期作と最新作を見比べてみてください。



(図1)《オリンピック雨林》2012年
©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi



(図2)《テアトロ・デイ・ロツツイ、シエナ》2014年
©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi



(図3) 軸 堀口捨己
キリスト胸像 14世紀
イタリアトスカナ地方
撮影：森山雅智 ©Hearst Fujingaho

開館20周年記念展

杉本博司 趣味と芸術-味占郷/今昔三部作

2015年10月28日(水)▷12月23日(水・祝)

【休館日】 11月2日(月)、12月7日(月)

【観覧料】 一般1,200円(1,000円) 大学生700円(500円)

※()内は前売券、団体20名以上の料金

※市内在住65歳以上の方は一般料金より2割引

※障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※前売券はミュージアムショップ(10月18日まで)、ローソンチケット[Lコード:38654]、セブンイレブン[セブンチケット]および、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(12月23日まで)にて販売

※11月3日(火・祝)は「開館20周年記念日」につき観覧無料。

「趣味と芸術-味占郷」-日本文化への新たなアプローチ

「趣味と芸術-味占郷」に展示されている品々の大半は、杉本の蒐集品から彼自身が選り出したものです。杉本は、80年代から90年代中頃まで副業として美術商の仕事に携わり、日本の古美術品を扱ってきました。古美術商の仕事から離れたあとも、日本の古代・中世の美術品を中心に、「趣味」として蒐集を続けてきました。「歴史の歴史」展以降、自らのコレクションに自作の写真も組み入れた展覧会を企画するようになってからは、蒐集の対象も、西洋の骨董、化石や石器、隕石や宇宙食、昭和史関連の資料など、美術の領域を超え大きく広がっていきます。

コレクションを使った展覧会の開催と並行して、杉本は茶会などの折に、自らの蒐集品から軸と置物を選んで、その催しにふさわしい「床のしつらえ」を披露してきました。2005年、「杉本博司 時間の終わり」展(森美術館)に際し、根津美術館庭園内茶室で三夕の和歌に仮託した3つの茶席を設えたときには、それぞれの歌にあわせた床飾りをつくりました。また2011年には、ニューヨークに自らの茶室「今冥土」を開き、茶会のたびにさまざまなしつらえでゲストを迎えています。

杉本は、2013年秋より『婦人画報』誌上で、「謎の割烹 味占郷」を連載してきました。この連載は、毎回「味占郷」という架空の割烹に文化人や芸能人を招待し、その人物にあわせて用意したしつらえと料理でおもてなしするという企画です。本展では、連載で紹介された床のしつらえを杉本の手により再構成するとともに、料理を盛った器の一部も展示します。

最近是不够なくなりましたが、一昔前の日本住宅では、客間の一角に床の間が設けられていました。そこに季節の掛け軸をかけ、花活けなどの置物をとりあわせて楽しむ習慣が、庶民のあいだにも浸透していました。床の間は、単に美術品を鑑賞するためだけの場所ではなく、季節の移り変わりを感じ、来客をもてなすための場所でもありました。杉本はこのような「床のしつらえ」を日本文化の象徴と考え、「床の間から、季節とその心が消え失せる時、その時は日本文

化が減る時」であるとさ述べています。

今回展示されるしつらえに使われた品々は、日本の古美術品に留まらず、レンブラントの版画や14世紀イタリアのキリスト像(図3)、18世紀フランスの解剖図や第2次世界大戦時の日本の軍事地図と実に多彩です。そして軸装あるいは屏風装された杉本自身の写真作品や、杉本と交流のある現代美術家須田悦弘による植物の木彫も彩りを添えます。杉本博司でなければつくることのできない、時に洗練され、時に斬新でユーモアあふれる床かざりの数々を、ぜひお楽しみください。

【当館主任学芸員 水沼啓和】

関連イベント

■ 開館20周年記念講演会 「時候を測る-江之浦測候所建設計画近況報告」

【講師】杉本博司

10月31日(土)14:00より/11階講堂にて/聴講無料/定員150名

■ 対談 杉本博司×千宗屋 「趣味と芸術」

【出演】杉本博司、千宗屋 【進行】河合正朝(当館館長)

11月7日(土)14:00より/11階講堂にて/聴講無料/定員150名

■ ワークショップ 「サイアノタイプ体験 ものの影を撮る」

【講師】倉谷拓朴(写真家)

11月29日(日)/10:00より/11階展示室にて/定員20名/参加費500円/対象 小学4年生以上

■ 映画上映会 「SUGIMOTO」

【監督】岸本康(2013年作品、66分)

11月22日(日)/14:00より/11階講堂にて/観覧無料/先着150名

■ 市民美術講座

「杉本博司と古美術」

【講師】河合正朝(当館館長)

12月5日(土)14:00より/11階講堂にて/聴講無料/先着150名

「ジオラマ、劇場、海景-杉本博司の初期三部作」

【講師】水沼啓和(当館学芸員)

12月19日(土)14:00より/11階講堂にて/聴講無料/先着150名



データで見る千葉市美術館の20年



千葉市美術館の歩み

*水色の文字は千葉市のできごと

千葉市新総合計画で、優れた芸術作品の鑑賞や自主的創作活動・発表の場としての美術館の建設について準備を進めることが示される。

今中宏コレクション(浮世絵)を市が購入。

第4次5か年計画で、美術館の設置について検討することが示される。

人口が80万人を突破。

千葉市美術館構想懇談会設置。

千葉都市モノレール開通。

千葉市美術館構想により、作品収集の基本方針「千葉市を中心とする房総ゆかりの作家・作品」「日本文化の核を形成する近世以降の美術品」「現代美術」が示される。

実施設計が行われる。

千葉マリンスタージウム(現QVCマリンフィールド)オープン。

開設準備室ができる。建築着工。

喜多川歌麿《納涼美人図》を購入。

政令指定都市に移行。

千葉ロッテマリーンズの本拠地が千葉へ移転。

建築完成。落成式を行う。
中央区役所新庁舎オープン。

初代館長に辻惟雄氏が就任。

さや堂ホールが市指定有形文化財となる。開館記念展「喜多川歌麿展」を開催。

花の美術館オープン。



落成式



「喜多川歌麿展」図録

旧神谷伝兵衛稲毛別荘(市内最古のコンクリート建造物／千葉市民ギャラリー・いなげ内)国登録有形文化財に指定。

千葉市美術館・中央区役所が「公共建築百選」に選定される。

小林忠氏が二代館長に就任。

展覧会(企画展を中心に)

1982



昭和2年に建てられた旧川崎銀行千葉支店の建物が、美術館・区役所新築にあたり、新しいビルの内部に包みこまれるようにしてそのまま復元保存されました。
ちなみにもとの建物は、銀行としての役割を終えた後、千葉市の所有となり、中央地区市民センターとして活用されていました。

1985

1986

1987

1988

1989



現在のさや堂ホールの様子

1990

1991

1992



喜多川歌麿
《納涼美人図》



開館記念展

1994

1995

11.3 -12.10 開館記念展 喜多川歌麿展

入場者数歴代2位
(54,287人)



1996

- 1.4 -2.5 Tranquility 一静謐
- 3.26 -4.21 大英博物館 肉筆浮世絵名品展
- 4.27 -6.9 祝福された四季 一近世日本絵画の諸相
- 6.15 -8.18 桑山忠明 プロジェクト'96
- 8.24 -9.23 フィリップスコレクションによる アメリカンモダンの旗手たち
- 10.1 -11.16 開館一周年記念 珠玉の日本美術 細見コレクションの全貌と、ボストン、クリーブランド、サックラーの話題作
- 11.23 -12.27 戦後美術の断面 兵庫県立近代美術館所蔵・山村コレクションから

1997

- 1.14 -2.16 生誕二百年記念 歌川国芳展
- 3.19 -4.24 超克するかたち 彫刻と立体
- 4.29 -6.15 ヨーロッパ絵画の巨匠たち フォルクヴァング美術館展
- 7.1 -8.31 天空の秘宝 チベット密教美術展
- 9.9 -10.12 日本の版画1 1900-1910 版のかたち百相
- 9.9 -10.19 関係 河口龍夫
- 10.21 -11.24 江戸の摺物 粋人たちの贈り物
- 11.1 -12.23 アメリカン・ストーリー 移動と変容の中で



「歌川国芳展」会場

1998

- 3.24 -5.5 江戸の鬼才 曾我蕭白展
- 5.12 -6.14 菅木志雄展
- 6.27 -8.2 東山魁夷展
- 8.8 -9.15 イギリス工芸運動と濱田庄司
- 9.29 -11.23 国立モスクワ東洋美術館所蔵 シルクロードのかざり 中央アジアとコーカサスの美術
- 12.5 -1.10 草月とその時代

入場者数歴代3位
(39,302人)



1999

- 3.30 -5.9 青木コレクション名品展 知られざる広重の肉筆を中心に
- 5.18 -6.27 山下りんとその時代



開館5周年記念として「菱川師宣展」を開催。
同展開催中に入場者50万人突破。
市政施行80周年記念モニュメント「ビッグ・
ツリー」完成

「現代根付」展を開催。高円宮家コレクション
も展示し、両殿下来館。
中央図書館・生涯学習センター オープン



「現代根付」展 展示の様子

千葉アートネットワーク・プロジェクト開始。
美術館ボランティア一期生が活動開始。



ボランティアによるギャラリートーク
活動(左)と鑑賞リーダー活動(右)



千葉市動物公園のレッサーパンダ風太が
人気者になる。

ミュージアムショップが
リニューアルオープン

金曜日に加えて土日も夜間開館を始め、休
館が第一月曜日のみとなる。
「広重 二大街道浮世絵展」会期中に入場者
100万人突破。

受付スタッフも皆様の
ご来館をお待ちしています！



1999

- 6.29 -8.1 甲斐庄楠音と大正期の画家たち
- 8.10 -9.12 絵巻物 ―アニメの源流
- 9.21 -10.24 日本の版画2 1911-1920 刻まれた「個」の饗宴
- 11.2 -12.12 房総の神と仏
- 12.21 -2.6 ジョゼフ・コッス 1965-1999 訪問者と外国人、孤立の時代

2000

- 4.4 -5.7 長澤蘆雪展 ―没後200年記念―
- 5.16 -7.16 高松次郎 ―1970年代の立体を中心に
- 7.22 -8.27 ベルギー絵画 ―20世紀の巨匠
- 9.5 -10.15 土門拳 ―日本の彫刻―
- 10.24 -11.26 千葉市美術館開館5周年記念 菱川師宣展

2001

- 1.4 -2.4 スイス・パウアーコレクション 浮世絵 美の極致
- 4.10 -6.3 ミニマル マキシマル ―ミニマルアートとその展開
- 6.12 -7.29 河井寛次郎と植木茂 ―ふたりの木彫
- 8.7 -9.24 キンゼイコレクション 現代根付
- 9.18 -10.21 日本の版画3 1921-1930 都市と女と光と影と
- 10.30 -12.9 江戸の異国趣味 ―南蘋風大流行―

2002

- 1.26 -3.3 雪村展―戦国時代のスーパー・エキセントリック―
- 4.9 -6.2 ジ・エッセンシャル
- 6.8 -7.14 アンジェ美術館展 ―ロココ絵画の華
- 7.16 -8.25 高村光雲とその時代展
- 9.14 -10.20 青春の浮世絵師 鈴木春信
- 11.2 -12.23 20世紀版画の巨匠 浜口陽三展

2003

- 1.4 -2.2 クラーク財団日本美術コレクション アメリカから来た日本
- 4.8 -5.11 ホノルル美術館所蔵 浮世絵風景画名品展
- 5.17 -6.29 斎藤義重展
- 8.19 -9.28 大原美術館所蔵名品展
- 10.11 -11.24 天津市芸術博物館展

2004

- 12.2 -2.1 ダン・グレアムによるダン・グレアム
- 5.22 -7.11 ピカソ、マティスと20世紀の画家たち
- 7.13 -8.29 藍と暮らす人々 トン族・ミャオ族・タイ族 太陽と精霊の布
- 8.31 -10.3 日本の版画4 1931-1940 棟方志功登場
- 10.9 -11.23 伝説の浮世絵開祖 岩佐又兵衛
- 11.30 -1.23 清水六兵衛歴代展 京の陶芸・伝統と革新

2005

- 4.5 -5.15 千葉市美術館開館10周年記念・NHK放送80周年記念 義経展
- 7.9 -8.28 ブラティスラヴァ世界絵本原画展 ―広がる絵本世界
- 10.25 -12.4 千葉市美術館開館10周年 ミラノ展 都市の芸術と歴史
- 12.17 -2.26 スイス現代美術展

2006

- 4.1 -5.28 戦後日本デザインの軌跡1953-2005 千葉からの挑戦
- 7.22 -8.27 イギリスの美しい本
- 9.5 -10.9 ―東海道・木曾街道― 広重 二大街道浮世絵展
- 11.3 -12.3 特別展 浦上玉堂



祝！100万人!!

2007

- 1.20 -2.25 竹久夢二展 ―描くことが生きること―
- 4.28 -6.10 鳥居清長 ―江戸のヴィーナス誕生―
- 6.16 -7.29 シャガール展
- 8.7 -9.17 都市のフランス 自然のイギリス
～18・19世紀絵画と挿絵本の世界～
- 9.23 -11.4 文承根・八木正 1973-83の仕事

2008

- 1.12 -3.2 日本の版画1941-1950 「日本の版画」とは何か
- 4.5 -5.18 池田満寿夫 知られざる全貌
- 6.3 -7.21 インドネシア更紗のすべて ―伝統と融合の芸術



日本の版画シリーズ
5冊 完結!!
1997年～2008年



友の会バスツアーでは八犬伝ゆかりの地を訪問

空調工事のため、半年間の休室期間に入る。



改修工事で穴の開けられた壁

リニューアルオープン記念所蔵作品展「近代美術の百花」(4.6-5.9)を開催。
ゆめ半島千葉国体2010開催。



プロジェクトルームにて開館15周年を記念する展示

東日本大震災により、「第42回千葉市民美術展覧会」会期半ばで臨時休館(「ボストン美術館浮世絵名品展」で再開)。



美術館でもゴーヤのグリーンカーテンに挑戦

河合正朝現館長が就任。



ファミリープログラム

推計人口が過去最も多い964,539人となる。



祝! 200万人!!

「川瀬巴水展—郷愁の日本風景」会期中に入場者200万人を達成。
幕張メッセ開業25周年を迎える。



「えほん屋台 pic-boo」登場!
絵本原画展
×WICANプロジェクト

開館20周年を迎える。
千葉市動物公園開園30周年を迎える。



歴代館長によるシンポジウム
「歴代館長よもやま話」

2008

- 7.29 -9.7 ブラティスラヴァ世界絵本原画展 歴代グランプリ作家とその仕事
- 9.13 -10.29 八犬伝の世界
- 11.1 -12.14 国立美術館所蔵による 20世紀の写真
- 12.20 -1.25 岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画

2009

- 4.4 -5.10 大和し美し 川端康成と安田靫彦
- 5.16 -6.21 パウル・クレー 東洋への夢
- 6.27 -8.9 瀧澤久仁子コレクション 祈りをつづる染と織 —タイの美しい布
- 5.22 -6.27 伊藤若冲 アナザーワールド

2010

- 7.6 -8.15 MASKS —仮の面
- 8.21 -9.26 田中一村 新たなる全貌
- 10.5 -12.5 世界の絵本がやってきた ブラティスラヴァ世界絵本原画展とチェコの人形劇
- 12.14 -1.23 帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション展
- 4.26 -6.5 ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代 —清長、歌麿、写楽

入場者数歴代1位
(61,166人)



「タイの美しい布」展にて伝統楽器によるコンサート

2011

- 6.14 -7.31 生誕130年 橋口五葉展
- 8.9 -10.2 浅川巧生誕120年記念展 浅川伯教・巧兄弟の心と眼 —朝鮮時代の美
- 10.10 -11.13 生誕250年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌
- 11.22 -1.29 瀧口修造とマルセル・デュシャン
- 4.10 -5.20 蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち



毎年行われている博物館学芸員実習生の受け入れ

2012

- 5.29 -7.8 浮世絵師 溪斎英泉
- 9.8 -10.21 ブラティスラヴァ世界絵本原画展 —広がる絵本のかたち
- 10.30 -12.16 須田悦弘展/須田悦弘による江戸の美

2013

- 1.4 -2.11 Kimono Beauty —シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—
- 4.16 -6.16 仏像半島 —房総の美しき仏たち
- 6.29 -8.18 生誕130年 彫刻家・高村光太郎展
- 10.1 -11.17 ジョルジュ・ルオー展
- 11.26 -1.19 生誕130年 川瀬巴水展 —郷愁の日本風景
- 1.25 -3.2 江戸の面影 浮世絵は何を描いてきたのか
- 4.8 -5.11 光琳を慕う —中村芳中
- 5.20 -6.29 島根県立石見美術館所蔵 水彩画家・大下藤次郎
- 7.8 -8.31 浮世絵に描かれた子どもたち
- 9.9 -10.19 錦木清方と江戸の風情



美術館ボランティアによる木版画多色摺りのワークショップ

2014

- 10.28 -12.23 赤瀬川原平の芸術原論展 1960年代から現在まで
- 1.4 -3.1 ブラティスラヴァ世界絵本原画展 —絵本をめぐる世界の旅—
- 4.10 -6.28 千葉市美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ所蔵名品展
- 5.19 -6.28 開館20周年記念 ドラッカー・コレクション 珠玉の水墨画 —「マネジメントの父」が愛した日本の美
- 7.7 -8.30 開館20周年記念 没後20年 ルーシー・リー展
- 9.8 -10.18 開館20周年記念 唐画もん—武禅に閻苑、若冲も
- 10.28 -12.23 開館20周年記念展 杉本博司 趣味と芸術—味占郷/今昔三部作

2015

- 1.4 -3.1 ブラティスラヴァ世界絵本原画展 —絵本をめぐる世界の旅—
- 4.10 -6.28 千葉市美術館開館20周年記念 歴代館長が選ぶ所蔵名品展
- 5.19 -6.28 開館20周年記念 ドラッカー・コレクション 珠玉の水墨画 —「マネジメントの父」が愛した日本の美
- 7.7 -8.30 開館20周年記念 没後20年 ルーシー・リー展
- 9.8 -10.18 開館20周年記念 唐画もん—武禅に閻苑、若冲も
- 10.28 -12.23 開館20周年記念展 杉本博司 趣味と芸術—味占郷/今昔三部作



今年新たに2名の学芸員を迎えました。
これからも千葉市美術館を
よろしくおねがいします!

千葉市美術館の開館20周年を記念して、オリジナルアクセサリーを制作しました。一見、積み木を重ねたような不思議な形をしています。何をモチーフにしたものなのでしょうか。

実は、美術館の建物をアレンジしたものなのです。大きい建物なので、あまり気にされたことがないかもしれませんが、上階の外観が階段のようになっています。(表紙参照)

千葉市でアクセサリーを作っている「OTTO OTTO」さんに、ピアス・ネックレス・ピンバッジの3種を作っていただきました。シルバー製で、表面を叩いて風合いを出しています。

美術館のグッズとしてだけでなく、日常でもお使いいただけるようなものを目指しました。ぜひ、ミュージアムショップでお手にとってみてください。



ピアス、ネックレス 各6,000円 ピンバッジ4,000円

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、スライドを用いながら千葉市美術館のコレクションや展示の内容を分かりやすく紹介するものです。

【時間】14:00より(開場は30分前)

【場所】11階講堂

【定員】先着150名(入場無料)

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

○第7回 12月5日(土)

「杉本博司と古美術」
【講師】河合正朝(当館館長)

○第8回 12月19日(土)

「ジオラマ、劇場、海景
—杉本博司の初期三部作—」
【講師】水沼啓和(当館主任学芸員)

○第9回 2月7日(土)

「千葉で生まれた浮世絵の始祖 菱川師宣」
【講師】田辺昌子(当館副館長兼学芸課長)

○第10回 2月20日(土)

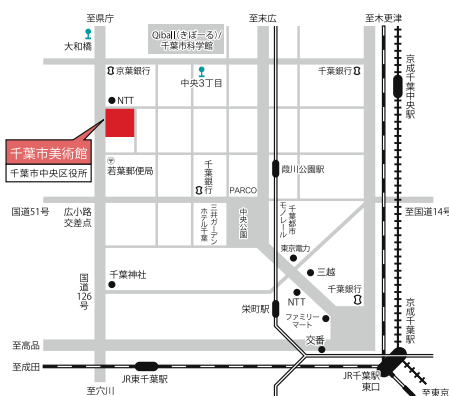
「新収蔵作品展について(仮称)」
【講師】松尾知子(当館学芸係長)

◎新春の獅子舞

2016年1月9日の開館時には、入口で獅子舞がお迎えします。

ご覧いただく登戸囃子連の獅子舞は登渡神社(通称 登戸神社)の例祭などで奉納されているもの。その神楽囃子は千葉市地域文化財に指定されており、東京の葛西囃子系深川囃子の流れをくんでいるそうです。

お正月の展覧会「初期浮世絵展一版の力・筆の力」の開幕にあわせて、江戸前のお囃子と縁起物の獅子舞をぜひお楽しみください。



【開館時間】

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【交通案内】

○JR千葉駅東口より

○徒歩約15分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

○京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

○東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

○地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan

<http://www.ccma-net.jp/>

【発行日】2015年12月1日

【印刷】株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art